

## 壺井栄論(20) 第八章 敗戦の混迷の中で(後篇)

A Study of TSUBOI Sakae (20): Her Agony During the Postwar Years ( )

鷲 只 雄

SAGI Tadao

はじめに

前稿では敗戦から一九四七年までの期間に発表された小説・児童文学・エッセイについて検討したので、本稿では引続いてその後の二年間、四九年末頃までをメドに論じることにした。

「紺の背広」(47・8「西日本」 初出未見)は前稿の落穂拾いだ、もうすぐ敗戦という時に、知人からのたつての所望で貸した背広(生地は義姉のアメリカ土産で、当時はもう手に入らないものでほんの何度かしか手を通さなかったものであった)が空襲で灰になり、相手に辛がらせないために平静を装う瘦せ我慢の経緯を描いて軽妙である。

—

「窓口」(48・1「芸苑」 「むらさき」の改題)は明治末から大正期にかけての郵便局が地方の住民にとつてどのように受け止められたか、その外見とは裏腹にいかにも過酷な勤務があり、それ故に後にカリエスとなった因をたどり、法外なピンハネが公然と行われていた次第を、手馴れた筆致で描き、「一夜ぐすり」(48・3「勤労者文学」1号)も同じく、幼時体験に取材し、父の樽屋が破産してのひもじい月日 特に風邪をひいた時にはうどん屋の一杯の熱いうどんを食べて汗を流すのが一ばん効くのだが、これにまつわる思い出を巧みにまとめた小品。「白いリボン」(48・5「社会圏」)は中国地方の地主の娘が知的障害者の弟をかかえて嫁き遅れ、弟が死んだ時には四十を越し、戦後の農地法の改正で農地は小作の手に移り、

タケノコ生活となり、五十五歳の時六十三歳で福島に住む男と結婚することになり、京都で白いリボンを目じるしに会うに至るプロセスを描いて戦後の世相の一端を示している。「ホクロ」(48・7・1「大衆クラフ」9号 日本共産党出版部発行)は検定試験上がりの旧制中学校教員と結婚した貧しい左官の娘クリの爪に火を灯すような辛苦の一生を、彼女のグチの中に描く。前者同様、直接のモデルはないと推察されるが、栄の長姉、千代は青山学院卒業の旧制中学の教師と結婚して朝鮮まで赴任していることから考えて、作中のいろいろな教育界の話題 赴任・昇給・外地・恩給等々については話題の提供を受けたこともあると推定される。

「青い季節」(48・6・7～同・12・13「全通新聞」全16回 月曜刊)良が五年ぶりに復員すると、病気の母の世話をしてまいとこのケイ子が待っていた。良はケイ子とは一度あったきりで、留守の間病気がちで、昨年死にそうだった母はあとつぎのつもりできてもらったのだ。一方、良には意中の人として会社の同僚小泉泰子があり、そのためケイ子にはツンケン当たる。ケイ子は何度も家を出ようと思う。やがて小泉は変り、共産党員となり、男のいるらしいことがわかり、良のケイ子への態度も変つてきて散歩に誘い、小泉への結婚祝にケイ子はアイロンを選んでやり、近所の郵便局に女子事務員募集の貼紙を見て働く決心をするというもので、二人の結婚を予感させるところで終わっている。恐ろしく荒っぽいストーリー展開で、戦争直後の 或る愛の物語 を描いたものであるが、問題はいくつも提出されている 跡継ぎ・タケノコ生活・復員者の荒廃・意識改革の問題等々、沢山出されてはいるが、いずれも出されただけで、問題は深められず、従って解決策はない。以後一度も単

行本に収録されなかったことが示すように、失敗作である。

以上がこの年に発表された小説であり、これを見て栄が戦後の文壇に復帰していないことは歴然としているであろう。

そういう中、小説に代わって栄を支えたのは児童文学の注文で、従前同様多くの作品が書かれた。それを次に見てゆきたい。

## 二

「おべんとう」(48・1「少女の友」)は 克子もの の一つで、前半の弁当泥棒という戦争後遺症の問題と、後半のピアノのレッスンを受けるために東京へ転校するという自立の問題とが異質なため、うまくかみ合っていないのが難点。「捨吉とすて犬」(48・1「子供雑誌」)は自分の名前を嫌がっている捨吉が拾った犬を連れ帰ると、兄や母が名前や飼うことに文句を言うのに対して食ってかかって皆を黙らせて飼うことにし、しかもこの犬が非常に賢い犬であった事情については次回にというもので、可もなく不可もない作品だが、特に冒頭の厄年の習慣というもののパンチ力の弱さが気にかかる。「柳の糸」(48・3「銀河」 初出原題は「ヤナギの糸」)は所謂「魔がさした瞬間」、あるいは「一瞬の出来心の恐ろしさ」を描いて圧巻であり、そこに至る経緯を悠然と記して間然するところがない作品。「赤い頭巾」(48・4「赤とんぼ」)は還暦の祝を迎えた社長とその小学校時代の同級生で貧しい一社員の家を対照的に描き、特に同級生の方は着てゆく紋付も、袴もない貧しさで手織の着物を恥しながら出向くというように子沢山の一家の反応、波紋に焦点をあてて、描き方としては陰々滅々ではなく、楽天的に(子供供の使い

方が効果的である) 随所に機知を織りこんで暗くならないように配慮して描いている。一篇の趣意は実もふたもなく言えば、金持の社長が怒意がいかに周囲に波紋を起し、人の心を深く傷つけるものであるかをヤエ一家の場合を通して描いたものである。読後感が必ずしもすっきりしないのはテーマがよくこなれていないせいであろう。

「虎狼よりこわいもの」(48・4 「少女の友別冊読物集第一集」)

は一家の働き手、大黒柱が出征したきり六年間音沙汰なしの母子家庭はどんな苦勞をどういうふうに味わっているかを示していて、小六の道子がかぜをひくと医者に診てもらうのは金がかかるのでまず質屋へ行って金を借り、炭屋へ行って部屋を暖める炭を買い、栄養をとるために卵を買う、そして虎や狼よりもこわいものは家に雨がモルことといって自衛策を講ずるのである。「青空草紙」(48・5 「銀河」 初出原題は「青ぞら草紙」) は書き物で今非常に不自由している紙の歴史を父 私 戦後と辿って見せ、ノートに沢山字を書ける時代の到来を望む。

「白い卵」(48・5 「童話教室」) は病後のミズエに栄養をつけようと白色レグホンをもらうが、せわをするうちに食べるのはやめて飼うことにし、玉子を生むと大騒ぎ。用心して育てるがついに猫が犬にやられてしまう。「直吉とねことバラの花」(48・5 「幼年クラブ」) は直吉のところに生まれたばかりの猫の子チロがもらわれてきて直吉は大事に育て、近所からもネズミが減ったと喜ばれるが、間もなく病気になる、死ぬ。死ぬ前に母と二人で看病し、童話を聞かせる中でチロは息をひきとるのだが、幼児に死への関心をもたせることをねらって作者は書いたものと思われる。

「窓から見えるお父さん」(48・5 「子ども村」) はノブコと志

郎の父は戦争で片足をなくして帰り、義足でガチャコン音をたて歩きながら役場の小使いをしているが、生活に困って子供のいない母の実家に志郎を預かってもらうことになっておばあさんが学生服を買って迎えに来るが、いざとなると柱にしがみついて離れないので、やめにするというもので家族の情愛の深さにポイントが置かれている。「夏みかん」(48・6 「子ども朝日」) は小学生の朝子と一夫が母の妊娠を知って大喜び、母の二つの願い お風呂をくみ、かこいの夏みかんを手に入れて家にとんで帰る話で姉弟の心のはずみがよく伝わってくる。「八津子」(48・6 「白鳥」) は自分の名前に不満があつてそれを父にぶつけると かわいいヤツ という意味と、ツには港や海の意味もあつて、七つの海にもう一つ津を加えたかったのだと話してくれたが、その父も戦争で死んだ。戦争の傷あとがここにもある。

「腰ぎんちゃく」(48・6・15 「小さな物語」 桜井書店 書き下ろし) は四つくらいでおくにはあさんにあずけられたタマキは腰ぎんちゃくのようにくっついて二年たち、再び母を迎えに来ても離れないのでしばらくこのままとなる。母と子の情愛を描いては非凡の腕を揮う栄の手並みの一端が見える作品。「花はだれのために」(48・8 「子どもペン」) は 右文もの の一つで、おじいさんとおばあさんはもらい子の右文が、咲いても咲いてもむしってしまう庭の花を、花はだれのために咲くのかわかるまでむしらせ、ひっこぬかせのために植えようと結論を出すに至るのだが、この栄のロジックはおかしい。前稿(栄論(19))の「リンゴの袋」においてその問題解決のしかたが独善的で間違っていることを指摘しておいたが、ここでも同様である。

花がだれのために咲くのかわかるまで、うちの花とよその花の区別なくむしらせるといふ考え方は、「自我を尊重」することではなく、単なる「強情とわがまま」を容認することにほかならず、それらはすべからず訂正、更改されるべきものであるからである。「あたにかい右の手」(48・9「少年少女の広場」)は争いことが嫌いで、決して人とは争わず、戦後のぎゅうぎゅう詰めの汽車の中でおされっぱなしでがまんしたために圧死してしまつた慈雨(中学一年)ちゃんを戦争の犠牲者として描いているが、作者の言によれば戦後に実際にあつた話との事だが、妙に観念的に過ぎてリアリティに乏しいうらみは否定できないのではないか。「おたまじゃくし」(48・9「童話読本」)は戦時中に防火用水として掘られた池が戦後もそのまま残り、危険だから埋めようと話すうちに、五才の男の子が落ちて死んでからはじめて埋められるというもので、これも又、戦争の傷跡ということになる。「耳からこぼる」(48・12「童話読本」)は幼児の思ひ出を三つ 手品でのごまかし、友だちに悪者にされてしまふ話、友だちにこの木の葉を煮るとゴム風船になるとだまされる話を巧みに語ってあきさせない。

「孤児ミギー」(48・5・49・3「P・T・A」全10回連載)は初出誌に連載された時の題名で、単行本として刊行された時には「右文覚え書」(51・6・15「三十書房」)と改題されており、同時に中味も表現も全面的に改稿され、増補されて、初出時の枚数(四〇〇字詰原稿用紙換算)は約一〇四枚と推定されるのに対して、初版本刊行時には約一二二枚になっている。

表題の右文とは何か、ということであるが、栄の長兄に岩井弥三郎があり、秀才の誉高く、香川師範に進み、同校を卒業と同時に母

校の付属小学校の教師となり、将来を囑望されたが、折柄父の樽屋が破産したため家運を挽回しようとして教師を辞め、弁護士になるべく上京して苦学するが、大正八年(一九一九)当時世界中で猛威をふるつたスペイン風邪で急逝。あとに妻と典(3才)と卓(1才)の二児が残され、栄たちは小豆島の実家で二年間二児を引きとつて育てた。長じて卓はジャーナリストになり、昭和十九年二月に吉水順子と結婚する際には栄夫婦は仲人を頼まれ、同年九月十一日に生まれたのが右文である。しかし卓はその頃社用で中国に渡つていたため、妻に男の子が生まれたら右文(文学を尊敬するという父の願いがこめられている)と名付けることを知らせてきたが、実際には顔を見ることなく翌年中国で没し、母の順子もチフスにかかつて昭和二十年九月八日に死亡した。右文は孤児となつたため、遺族から養育を託され、同年九月二十九日の順子の葬式の日ひきとつて育て、のち養子とした。右文と栄の間にはこういう経緯があり、その間柄は栄の方から言えば甥の子であり、右文の方から言えば大叔母なのである。

当時、敗戦により日本の餓死者は一千万人を超えるであろうと推定され、生存していく上で一番の前提となる食糧の危機に脅かされ、作家としては再出発の契機をどこに求め、何を書いてゆけばよいのか、暗中模索の状態であり、加えて「妻の座」事件、プロレタリア作家仲間の徳永直から妻を亡くして困っているから後妻を世話してほしいと頼まれ、栄の妹との結婚がまとまるが、出る入るの騒動の後僅か二カ月で破綻となり、これによつて栄の受けた精神的打撃は大きく、それに更年期症状の肉体的不調も加わつて、まず自分自身がこの未曾有の危機を生きのびられるかどうか危ぶまれる状態であつ



たわけで、その事は「八」章の広島の家の話題（右文の父方の祖母と伯父典「建築士」は広島に住んでいて、右文を引きとりたいとはつきり栄の方に伝えてきていた。）に明らかである。なお、この間の事情については最新の情報によって補っておく次のようになる。

壺井栄の事跡を追求める過程で私は広島を訪ねた折、弥三郎の妻方の縁者の方々と接触する機会を得て有益であつたが、その縁で思いがけずかつて典と結婚して二児をもうけ、昭和四十八年に離婚された瀬川茅花氏と知り合うことが出来、直接種々の教示を得たほか、茅花氏宛の栄書簡九通と、同じく同氏宛の繁治書簡一通の披見を許された上、文泉堂版壺井栄全集<sup>12</sup>巻への収録を快諾して下さつたのは望外の幸せであり、氏に深く感謝申し上げる次第である。

次に右の全集に収録の栄書簡の引用によって広島岩井家とのやり取りの実態を見ておきたい。

書簡（116）昭21（推定）年5月30日付典宛書簡では、右文を「今つれにこられるのはどんなものでしょうか。ちよつと無茶ではないかと思うのですが、いかがでしょう。」今すぐにでも引き取りに出向くというのを制して「六月中頃に大阪への用事がありますので、出来れば一度試しに広島までのばしてみようかと思っています。その上で汽車にのせようではありませんか。」と、とにかくはやる気持ちにフエイントをかけて、私の大阪への旅行というのを持ち出してタイミングをずらす作戦と見てよいようである。

その証拠に、次の手紙（117）昭21（推定）年7月18日付茅花宛で「さて、私の旅行ですが、切符まで持つて汽車に乗るばかりのところで身体の調子が悪くなりまして、取り止めになっています。（中略）この暑さと交通地獄では秋までのばすより手がないと思います」

とあつさり旅行の延期を宣言しているからである。その秋も過ぎて、一向に動かない栄達に対しての広島からの催促に対しては（118）昭22（推定）年1月25日付典・茅花宛で「右ちゃんの事につきましての茅花さんのお心づかいのこと、本当にありがたく存じますが、しかし第三者の立場をとつて考えますとき、今暫く私のところにいる方がよいと思われまふ。（中略）右文は大人手のかかる子供です。惻かな点は惻巧ですが、とにかく発育不良が原因かと思ひますが、まだおしつこが云えないのです。そんな子供ですから、一人ならまだよろしいが、三枝ちゃんを抱えての上では、茅花さんの苦勞が思ひやられますから。」と表向きは丁寧なことわりようであるが、内実は日一日と増してゆく右文への愛情にからめとられて溺愛し、これに溺れて他人からの介入は頑なに拒絶し、にべもなくことわるといふスタンスで一貫していると言つてよい。

さて、大分長くなったので以下出来るだけ簡潔に述べることにしたい。

「右文覚え書」は敗戦直前に父を、直後に母を亡くして孤児となつた満一歳の右文を引きとつて帰つてくれと押し付けられて養子として五回目の誕生日を迎えるまでに成長した右文の成長の記録である。先程、初出から初版への過程で、改題・改稿・増補があつたと指摘したが、その全てについてふれることはできないが、その主な特徴についてふれることから始めよう。

（一）文体の変化・性格の変化  
初出の「一」章の冒頭はこうである。

孤児ミギーの本名は右文なのですが、だれもミギフミとよぶものはなく、ミギちゃんだの、ミギーだの通つています。

ところが、初版の「二」章の冒頭は次のように改められている。

日かげの草も時がくれば花が咲く。

右文がようやく子供なみに近所歩きをするようになった。日かげの草どころか、天気さえよければ太陽の光り漬けにして育て、やっと書をふくらませかけたのである。それでもよその子にくらべて、どんなにひいき目にみてもかばそかった。駈けっこをして、けんかをして、後から生まれた子にまけてしまう。泣き虫である。甘ったれである。そのくせ理屈っぽい。

文体が初出の、切口上で端正で不自由な鎧をまとった「です・ます体」から初版では何の制約もなく、自在な「た・である体」に変わり、そのことで話者の感情というが、溜まりに溜まった思いのたけを吐き出すことが可能になり、そして又自由にもなり、並外れて發育不良で、超未熟児の右文をボロクソに表現する中に浮かび上がらせることに成功したのだと言つてよいであらう。

それから非常に大事なことだが、この文体の変更によつて初出の「孤児ミギー」は児童文学であつたが、改稿された初版の「右文覚え書」は小説に変わったというように作品の性格が変化していることである。

### (二) 記録の重視

次に「二」章の改訂・増補の特徴はどこにあるかと言えば第一に事実をきちんとおさえ、記録を重視している事である。

「昭和二十年九月二十九日のお昼すぎ、横浜市庚台五十三番地」で「卓と順子の告別式」があり、「喪主は右文」、「私たち」は亡き人の「叔母夫婦」であり、「仲人」であつたと初版は事実の記録に

とつては必須の条件 日時・場所・氏名・関係を明記して、万一の場合、後年検証できる手がかりをはつきり残している。これに対して初出では、場所の明示はなく、卓の名も記されず、肝腎の「私たち」は単に「仲人」をした「老夫婦」と記されるのみであつてこれでは何故この老夫婦が右文を引きとるのが納得できるロジックで説明されることはない。言いかえれば、初版の記述というのは、初出にあつた小説性、あるいは曖昧性は排して可能な限り事実在即した記録性に徹したものを目指していると言つてよい。

### (三) 作品の奥行き

また、告別式の卓と順子の遺影にふれながらこう語る。この写真は卓が南京へ行く直前のもので、妊娠していた順子は夫が先に行き、身二つになつてからそのあとを追う予定であつたが、夫の死によつて一年一寸で二人の生活は終り、やつと戦争をくりぬけたのに二十三歳でチフスにやられてしまったのだ。

その順子が最後に栄の家に來たのは死ぬ半月程前の事で（遺骨も届いていない夫の葬式のことで相談に來たのだ）敗戦後の解放感はこの若い未亡人を浮き浮きさせ「空襲がないって、ほんとにいいですね。私、もうじゃんじゃん働こうと思いますの。だって、私なんかまだ二十三ですもの。これからですわね。こんなじゃまっけな荷物なんかどっかへ預けちゃあ。坊や、どっかへいっちゃいなさいよ。ハイチャ」と逞しく再生への意欲を語つていて、この言葉とは逆に右文を手放して身軽になつて再出発をすすめる周囲には、殊に右文の養子話に対しては手きびしく拒否していた。

その順子も死のせまつた病床では「くりかえし私の名を呼び右文を頼む」と弟に言つたという。

電報での順子の死の知らせはあまりにも突然であったから、自殺かしら？それとも交通事故？とも思案し、右文をひきとつてくれと言われる可能性もあるかもしれないとは夫婦で話していたので、曾祖母から到着早々一方的に「二十秒位」の間に今日引取って連れ帰ってくれと宣言されたのには、おしつけ、口封じの思いはあるが、しかしそれを口に出しても事態は変わらぬ、なら黙って引き取るうというプロセスを経て実現したものであるのだ。

右に記した、若い夫婦の将来の計画や順子の再生への意欲や右文を養子に出すことへの拒絶、死の前後の憶測、引き取りの経緯（これについては初出の記述は結果のみ）については初出にはなく、初版で増補されたものであって、それにより家庭の事情が明らかにとなり、人物の個性が輝き、作品世界の奥行きが深くなっていることは間違いないところであろう。

#### (四) 平和の訴え

最後に初版のもう一つの変更を明らかにしてこの作品の検討を終わりにしたい。

初出の「十一」章は全面的に改稿され、同じく改稿された「十二」章のあとに付け加えて合体されている。

合体して最後にもっていったのは、右文がしきりにライターや時計をほしがり、次々にこわしているのは何よりも彼の「知識欲」の現れであり、成長の証にほかならないからであろう。同時に働くものの世の中としあわせを祈るメーデーの歌を右文と歌うことでこの作品のテーマである平和を訴えたかったからであろうが、唐突の感否めぬ。

児童文学ではないが、右文ものの小説が七篇「右文覚え書」

には収録されており、そのうち三篇については既にふれたので、残りの四篇についてふれておきたい。

「一粒のぶどう」（初出未詳 50・8～51・4 以前と推定）は右文の将来のために、父母の来歴・壺井家に来た経緯・養子縁組のプロセスを記したものでこれまでの繰り返し。「日が照り雨」（50・11「女性改造」）は右文の小学校入学を間近にして、栄の体調不良もあって実子・実母でないことを右文が知った時の動揺、不安から回避させようと事実を話す試みであり、「めみえの旅」（51・4「小説新潮」）も同じく栄の病弱から万一の場合には後事を託すること、右文の来年小学校を前に真実を直接に知らせるために、広島に住む祖母と伯父一家への訪問旅行記であり、「朝靄」（書き下ろし 51・4・15「右文覚え書」初収）は一年生になる直前の右文が八幡様の寶銭箱から泥棒したり、友達に盗んできたお金で買いたった物を秘密基地に隠しておいたのを見つけて捨てさせる話で、共通して栄の病弱から右文の成人する姿は見届けられないのではないかという生命への不安と、もう一つ、栄母子が実子・実母ではなく、母は死んだのだということをお節介にも右文に告げて反応を見るという不愉快な事件がおこり、その対策としても事実を実際に話して聞かせたり、祖母や伯父・伯母、従姉妹に実際に合わせて動揺や誤解を回避する努力をしている点で共通している。

作品の出来という点からきびく言えば、構成と凝集力の点で七篇共に今一つという所であるが、素材のもつ力という点からすれば「右文覚え書」「めみえの旅」であろうか。

「ちいさなだるまさん」（初出未詳「おみやげ」 48・9・15 好江書房に初収）は六十位のおばあさんと四、五才の女の子が訪ねて

きて身体一つで引揚げてきて困っているからというので茶碗と小皿をあげると女の子は受取り、手から青木の赤い実がこぼれると「あ、ダルマ、ダルマ」とあわてて拾って大事そうにポケットにしまつて帰り、私も「あ、ダルマ、ダルマ」とつぶやき、もう一度つぶやいてみると青木の実がダルマになって見えたというもので、典型的な悲しい戦後風景の一つが見事に切り取られて赤いだるまとなつて輝いている。「ろう石」(初出未詳 同前)は引揚げ者の治と母は小さなバラックに住んでいるが、将来はいい家にする楽しいプランがあり、日曜日に母に連れられて以前の友だち森平の家を訪ね、今は音楽の勉強をしているという森平のバイオリンを聞かせてもらい、おみやげにろう石をもらつて帰る。いずれも引揚げ者の窮状と戦災にあわなかった家とが対照的に描かれているが、作者のねらいは引揚げ者が困窮に負けないで、未来を信じてしっかり生きようとしているところにあるのであろう。

### 三

敗戦後三年目になると生活の苦しさは相変わらずではあつても、多少のゆとりはでてきたようで、本稿では随筆のみならず、評論・小論・ルポルタージュ・対談・座談会等の雑文を全てひっくるめてエッセイとよんでいるが、そういう中に批評や映画評もまじるようになってきているが、昭和二十三年のものとして第一にあげるべきものは「ルポルタージュ 忘れられた人々」(国立箱根療養所訪問記)「(48・6「女性線」)である。

ここは日露戦争以後、傷病兵のための国立療養所として建てられ

たもので、傷兵の中でも最も重度とされる脊髄損傷によつて下半身が麻痺している人達を收容して精神的に再起させるのが目的で傷兵85名と付添人の妻や子供たちがぎびしい暮しとたたかっている。栄がここを訪ねたのは二度目で、前回昭和十七年(「傷病軍人療養所の日」42・6「女性生活」)に來た時は軍事保護院の斡旋で林美子以下女流文学者会のメンバー七人と一緒に賑やかであり、表面的には知られざる傷病軍人の存在とその姿を伝え、「勇士」の加餐を願うものであつたが、実際にはそういう空疎な美辞麗句はどこにもない。というよりもここで栄が企図したことは戦意の昂揚や国防のために戦つて傷ついた傷兵への感謝の辞を述べるのではなく、傷兵達の姿を淡々と感情を交えずに読者に伝えることであり、そのことで読者の脳裡には傷兵たちの無惨な姿が残り、家族の苦勞が思いやられ、行きつくところ戦争はごめんだということであつたにちがいない。作品は一貫して傷兵とその家族の救われぬ「心境」と、今後の「苦勞」を写しているところにそのことは明らかであつた。

それでも戦争中はまだいんな形で生活を保証されていたからよかつたが、敗戦を境に急転回し、軍事援護会の補助がなくなり、恩給も打ち切られ、僅かに生活保護法による四、五百円が定収という無惨な生活を余儀なくされている。この作品における問題の一つは明らかにこの無惨な生を生きる傷兵たちの問題である。

もう一つは妻の「本能」の問題である。ここの傷兵の病状は決してよくはならない、むしろ悪くなり、手がかるばかりの介護の苦闘を「献身」と称賛して能事終われりとしている事への疑問が栄にはある。それは質問に出ていて、ストレスやフラストレーションから問題を起したり、暴走したりした人はなかったのか?と。それに



対しては、否定はしないが、個人的な事には立入れないからと役人的な返事が返ったのみ。

しかし、「死んでしまった本能」と「押し殺した本能」とが「家庭」を作っているわけで、特に女にはかり負担と苦勞と犠牲を強いているのが実態であり、それを「献身」の美名ですますのはキレイゴトにすぎよう。その中にあるもの、本音をほじくり出し、その「献身」の中に隠された真実を白昼の中にさらけだすのがねらいであるうが、その一歩手前で終わっているのが残念である。

しかし、栄は戦争中に目にさせられ、書かされた悲惨な現実のショックを戦後も忘れなかったばかりでなく、おそらくは自らの発意でルポに出かけ、その責任をきちんと果たしているのは称賛されてしかるべきであるう。これこそきつかけは戦争協力であつたにしろ、自らの戦争責任について自覚しているものの態度というべきではないであろうか。

次にあげるべきは三人の子育てにかかわったことで「私の雑記帳から」(48・1「女性改造」)、「子そだつ」(48・4「世界文化」)にはその苦勞と喜びが生き生きと述べられ、「ちぎれ雲」(48・3「大学」)は幼時の回想の中に浮かぶ三人の女の子の哀切な姿で、掌編小説の味わいがある。

#### 四

次に一九四九年の小説に移る。「お芝居」(49・1「新女苑」)は童話作家秋本ミネと共産党員の詩人悠吉の家に夜、子連れの一四、五の女が身上相談 北海道から夫を置いて上京、ダンサーとして働

くがやってゆけない、同棲していた親切な男は偽学生という話を聞いて、食事をさせ、一泊させた上で翌日、夫にあやまって家に帰れと汽車賃を与えて帰すというもので、戦後の風俗であるパンパンまがいの女をコント風にしあげたもの。

「たからの宿」(49・3・25 弘文堂 書きおろし)は松太郎・つるえのお人好し夫婦の、昭和初めから敗戦後の昭和二十三年秋までを その間ミユキを引きとり、中田一家には一切合財盗み出されたり、松太郎が刑務所暮らしになると今度はつるえが、本部で雑務をして生活を支えるが、夫が刑務所を出る頃には左翼運動は息の根を止められていて、サラリーマンとなり、つるえは内職の裁縫でもちこたえる、敗戦後、従兄弟の子、左翼をひきとり、若返って生きかえる。

栄一家の半生の歴史を概略たどったものだが、細部には事実と異なるフィクションが随所にはさみこまれていて、これはこれで別の作品という思いがあるのであるうが、緊密な構成に欠ける憾みは払拭できていない。付言すれば戦後一時期刊行され、知的・良心的な評価の高かったアテネ文庫の一冊として書き下ろされたものである。

「二人静」(49・5「女性改造」)は道子と徳子の姉妹を、姉は従来の古風で従順、無意志的なタイプに描いて結婚させるが、僅か五カ月で破綻。妹は勤めに出て活発で意志的、自らの意見をはっきり言うタイプで、今度のメーデーに組合で行くが、姉にも見物に行かないかと誘う。最初から結論が見えているような話を延々と聞かされる辛さがある。「嫁」(49・6「風雪」)は戦後十年位巷間に聞かれた所謂タケノコ生活の苦悶をじかに訴えた作品であるが、この作品のユニークな点は、残された遺族 中風の舅・嫁・四人の小学生

には月三千五十円の収入しかないにもかかわらず、税務署は三万円を支払わないと差し押さえると赤紙をよこしたのをきっかけに舅と嫁は遂に激怒して立ち上がり理路整然とした嘆願書をつきつけて對抗するところに戦後の強さ、新しさを見ることができよう。なお、モデルに関して言えば、舅の英三郎は養女真澄の実父林政吉がモデルになっていると思われる。「うつむいた女」(49・7「小説新潮」)は小豆島に飲み屋の女給の私生児として生まれた真誓の一生をたどったもので、出生故につきまとう差別、偏見、不幸のため郷里の網小屋で野垂れ死にする過程を描くのだが、余りにもそれだけにこたわり過ぎる故に、夫も子どもも生きていない憾みがある。

「シャツボをぬぐ」(49・7「婦人」)は例の克子もので、知り合いから良い条件でピアノが手に入ったところから東京に引き取り、ピアノの練習をさせるが、十四歳の彼女のわがままぶり、女王様とした独善ぶりに、一家の中で風波が絶えず、遂に実家にもどすまでを描いた作品。作品としてはピアノを買い、姪を引きとる過程に余りにも配慮のなさ、安易さ、幼稚さが露呈されていることは歴然としている。例えば、左の一節。夫がピアノを買いことに難色・不安を表明するのに対して妻はこういうのだ。

「その出来ないところをしようじゃないの。第一、われわれの一生で、たとえばたピアノにしろ、ピアノをかうというのになかなかいいじゃないの。この貧乏さの中で、盲目の姪にピアノを買ってやるなんて、美談よ。うわあいい気持ちだ」

年譜の上では姪(小学六年)を一九四七年九月から鷺宮小学校へ転校させ、将来の自活を考えてピアノのレッスンを開始させたことは事実であるが、四九年三月には何故か中途でやめさせて実家にも

どしているのだが、その事情については不明であった。唯一その事情について明らかにしてくれるのがこの作品で、同時にこの作品がその後単行本や作品集、全集に一切収録されなかったことがその間の事情を不明にした因であろう。

## 五

この年の小説は以上なので、次に児童文学に移る。「ポケットの中のおかあさん」(49・2「子どもの村」)は、右文もので、本物とオモチャの対比研究など、その後の成長ぶりを示す話しを点綴し、「村のクラス会」(49・4「銀河」)は栄の小豆島への帰郷を契機に小学校卒業後35年ぶりにクラス会をした時の感想。会する者27人中11人(男は6人、女は5人)、一人を除いて皆それぞれに戦争の傷あとを受けていて「戦争はもうごめんじや」と異口同音であったが、五十をすぎたみんなが六年生の昔に返って楽しく騒ぎ、再会を約したのであった。この作品の一番の特徴は登場人物たちの小学生時代と現在の対比が鮮やかなことで、一筆でその人生を的確にとらえて見せてくれることである。栄の代表作「二十四の瞳」を読んだことのある読者ならば末尾の大石先生の歓迎会は分教場のクラス会であったわけで、その原型は実は「村のクラス会」であったことに気づかれることであろう。

次に児童文学を一冊にまとめた単行本として「柿の木のある家」(49・4・20)山の木書店収録作品は柿の木のある家・花はだれのために・窓から見えるおとうさん・夏みかん・おたまじゃくし・あたたかい右の手・耳からこぼるう・お母さんのてのひら・リンゴの

袋の九作品）が刊行され、「柿の木のある家」を除いて他は全て戦後に書かれたもの。戦争末期に出版された『海の花ましい』（44・6・14 大日本雄弁会講談社）の一部に取材してこれを改作して『柿の木のある家』と表題も改めた。

その結果、この二作は分量が1.3となったのをはじめとして、その主題・内容・構成・作品の性格において全く別の作品になったという重要な問題があり、その事についてはすでに詳述したのでそちらを参照していただきたい。同様に「童話のある風景」（47・12・11）48・7・15「婦人民主新聞」は22回連載したところで作者の病気のため未完中絶となり、のち全面的に改稿・改題して「リンゴの袋」として前出の「柿の木のある家」に初収。のち「壺井栄作品集2 柿の木のある家」（56・9・5 筑摩書房）に収録後、タイトル表記を「りんごの袋」に改めた。

この作品の含む問題についても前稿で論じたのでそちらに譲って繰り返さないが、一つだけ言っておくと、この作品の最大の特徴は戦後の暗い世相を反映して、暗い素材が次々に並ぶダークサイド小説。タケノコ生活の苦勞・迷信をかつぎ、新興宗教にすぎる人々・袋貼りの内職・欠食児童とイジメ・闇屋の問題等々というようになまましい、アクチュアルな問題が次々に登場し、しかもどれ一つをとっても大きな問題で、そのうちの一つの問題だけをとりても十分一つの作品のテーマになりうるわけで、それをこのように次から次へと事件の連続というふうに列挙、あるいは羅列してゆくというのは、作者はこの作品において戦後日本の社会における問題を一つ一つとりあげて、それを如何に解決するかにポイントを置くのではなくて、どういう問題が、いかに山積しているかを書きたかった、

問題を解決するよりも、問題を提示する、あるいは提案するタイプの作品を書きたかった、ということであろうと思われる。その意味では異色の作品である。この作品集「柿の木のある家」に対しては一九五一（昭和二十六）年第一回児童文学者協会児童文学賞が与えられた。次いで翌年一九五二（昭和二十七年）年第二回芸術選奨文部大臣賞が「母のない子と子のない母と」「坂道」に対して与えられ、まず児童文学の世界での復活と業績の評価が決定的となった。

「柿の木のある家」に初収で、これまでふれなかった作品に「お母さんのてのひら」（46・12「国民教育・中学年」初出未見）がある。これは働き者であった「田舎の百姓女」母の追想で、おやつがそろまめのいつたのを一にぎりずつだったとき、栄と弟が多い、少ないと文句をつけると、「数えてみな」といわれて数えると両方ともピッタリ28粒 えこひいきのない魔法の手であったことがあかされる。

「はるばるのたより」（49・7・15「別冊少年朝日」）は壺井栄論（19）でとりあげた「白いおくりもの」と同じく、アメリカものの一つで、アメリカに住む大叔父から母校の小学校にキャンデーのプレゼントが届いて大騒ぎになる話であるが、前作とは違って大叔父の素姓や渡米の経緯、人柄やエピソードなどを明かさず、子供たちに関書調査をさせて少しづつ明らかにしてゆくところが目新しく、わくわくさせる魅力がある。モデルについては前掲稿参照。

「ヤギ屋のきょうだい」（49・8「銀河」）は、父がソ連に抑留されて未帰還の家族（母と兄、妹の三人）の心情と、やがて病死の広報が入ってからの窮状を描きつつ、母を助けてヤギ屋として明るく生きてゆく兄妹の奮闘ぶりにエールを送っている。

「サツキの歌」(49・8・21)同・10・16「なかよし新聞」週刊

全9回 アカハタ編集局発行)は父の失業で小学生の姉弟の机を売るうかというところまで追いつめられ、姉のサツキがアルバイトをあれこれ考えた末、父と一緒に納豆売りを始めることに決める。その前夜、売り声の練習をするが声が出ず、踏み切りで電車に向った時始めて出る、というもので、生活苦を助けるためにアルバイトを開始する小学生という極めてシリアスな話題を、小学生の女の子の目線から追及するという困難な課題に挑戦したものとしてひとまず評価できよう。しかし、そこに至るプロセスは余りにも問題山積で十分に納得できるものとは言い難いという悩みは否定できない。

「船できた象」(49・12「子ども村」)は敗戦後タイから日本へ象がくる事を新聞で知って楽しみに待つ一家の話の中に、戦時中軍の命令で動物園の動物を全部殺すことになった時、象は餓死させたのだが、その時飼育係がやせ細った象の傍に行くと、芋ほしさに逆立ちの芸をしてみせて死んだという戦争の悲劇もありこんだもので、インパクトは強い。「みすずの子ねこ」(49・12「小学五年生」)は子ねこが行方不明になってがっかりしていたみすず。転校してきたみすずねは父が戦死して、今は母子で親せきの厄介になっており、大事にしているねこを捨てると言われて困っており、それを聞いたみすずは買って育てるといふもので、猫好きの人々の交流を描いた佳品であるが、その中に作者は次の一句をさしはさむことを忘れない。みすずの父が戦死して母と二人親戚にこらがりこんで「何しろ人の家におるものですから、ねこ一ぴきも気ままにはできないので」という戦争の悲劇を示す言葉をこの前後には必ずといってよい程はさんでいる。

六

次にエッセイ類の中から目立ったものを採り上げてみたい。49年に発表されたものは私の調査した限りでは17篇である。そのうち、「知るべし、よるべからず 妻の責任ということについて」(49・4「婦人文庫」)は戦後に生きる新しい女性のありかたについて三人の女性を例に具体的に述べている。第一は伝統的、典型的な花嫁候補者で、普通以上の美人、女一通りの稽古事はすべて身に付け、嫁入り道具もすべて整っている。ところが相手がなくて婿探しに躍起だという。ちなみにその女性と見合いをした青年は彼女に何の魅力も感じなかったらしく、言下にことわり、つけ加えてそんな立派な嫁さんをもらっても、沢山の荷物の置き場にも困るし、そういう女性をしあわせに暮らせるためには、男は一生汗の流し通しでもおっつかないだろうといったそうだが、正鵠を射た指摘というべきであろう。いいことさえ並べれば立派だと思いきこんでいる馬鹿さ加減がそこにはあろう。

次は戦後の解き放たれた喜びの中で恋愛結婚した夫婦なので、しあわせな生活を築いてゆくものと期待していたが、案に相違してうまくゆかない。原因は酒で、妻が酒を嫌って出さないうちに夫は夕食に帰らず、遂には月給も殆ど妻の手には渡らなくなってしまうというのだが、この妻の場合タケノコ生活でのやりくり算段の大変さはわかるが、夫が夕食に帰らず、給料が妻の手に渡らないというのでは家庭崩壊であり、これでは元も子もないので何とか知恵を働かせて夫の足を家庭に向かわせるようにしなければならぬのだ



ろつ。

最後の例は三十過ぎの四児の母で、内職でやつと暮しているのが月に二、三度は古着屋に行かなければならない。しかもその際子供たちを連れて堂々行き、実地に見学させるといふ。また、この女性には「反抗的な大盤ふるまい」があつて、ふだんは挽肉三十匁なのに、時にはロースを二百匁買い、ある時は質屋へかけつけて一家総出の芝居見物をしたりという具合に、亭主の言葉を借りれば「彼女のやけくそめ思いつきで、うちの家族は辛うじて文化と栄養を補給されているんです。この方が利口かも知れませんか」という三例を出して、これからの女性には「人間としての責任を全うする意味でも、もっと気持ちをゆたかに、押しひろげてゆかねばならないのではないでしょうか。」と言わばショック療法ともいふべき荒療治もあることを提案する。

「死なない蛸」の作者（49・4・30「民情通信」11号 譲原昌子追悼号）は譲原昌子（1911・11・14〜49・1・2）という北海道で生まれ、樺太で育ち、29年3月に樺太庁豊原高等女学校補習科卒業後、小学校訓導の資格を得、同地で小学校の教員となり、かたわら「文芸首都」（33・6から掲載）や「樺太」（36・10から掲載）に詩や小説を発表、中に原始・野人の如き出稼ぎ人達の生きざま、死にざまをすさまじい迫力で描いた秀作「朔北の闘い」（39・2「文芸首都」）や継母と娘との間の愛と憎しみ、孤独と嫉妬の三十年を描いた「抒情歌」（41・3「早稲田文学」）代表作「故郷の岸」（43・1〜2「新作家」）などを得、それらが芥川賞候補にあげられたこともあつて41年3月教職を辞し、作家を志して上京するも不幸開戦となり、加えて結核を発病、49年1月12日東京清瀬の国立療養所で

満三十七歳で没した。栄が昌子と知り合つのは第一回新日本文学創作コンクールの選者として彼女の作品を第一位に選んだことによつてである。

「死なない蛸」（47・3・6「民衆の旗」）は萩原朔太郎の詩にあるように、飢えの極点で自らを全て食べ尽くして消えてしまった、しかし「物すこい欠乏と不満」をもった存在として「永遠に生きていた」蛸のように、飢餓線上にある津香子も含めた人間がぎつしり乗っている電車自体が、人間が電車に乗っているというよりも「飢えた蛸の如くに、自らの肉体のほかには食うべき何物も持たぬ彼等の、米粒の代わりに詰められた凄まじい欠乏と憤怒ではり裂けそうな胃袋が積みこまれているのだ」とプロテストする鬼気迫る作品である。栄は前記の追悼号の中で次のように言つた。

新日本文学のコンクールの作品の中から「死なない蛸」を見つけたのは一昨年の夏だったと思う。（中略）病氣だった私は蚊帳の中で横になって一つ一つの作品を読んでいた。そして幾篇目かに「死なない蛸」にゆき当った。二枚、三枚とよんでゆくうちに、私は起き上がって坐った。自分ひとりで読むのが惜しくなってきた。私は壺井繁治を蚊帳の中へ呼びこんで、始めから朗読した。病人なので声が續かず、繁治に代つてもらつたりした。そうして何の躊躇もなくこれを推せんしたのだった。この作品一つを見つけたことだけでもコンクールの意義があつたとまで私は考え、そのような意見を出したのだった。

「創作コンクール」は当初新日本文学会の東京支部によつて第一回（46年）、第二回（47年7号）が行われ、第三回以後は全国規模となり、新日本文学会の中央委員会の所管に変わった。

栄は豊島与志雄・中野重治・徳永直・谷崎精二・佐多稲子・松田解子と共に 小説・戯曲 部門の選者であったが、第一回の結果発表については入選者名の発表は「新日本文学」誌上にはなく、入選作の掲載も前掲のように「民衆の旗」に分載のあつかいであり、第二回で漸く詩三篇と小説一篇が「新日本文学」誌上に掲載されることにはなったが、コンクールの結果発表については裏表紙の「原稿募集」欄に入選者名のみ記載されているにすぎず、選評などはない。

栄の文中、「『昨年』の夏」では47年のこととなりあやまりなので、「昨年」(または、さきおとし)と改めなくてはならない。栄はこのあと、新日本文学会の集まりで一度昌子に出会って挨拶されたことがあるほかは会う機会がなかったようで、彼女の中にあつた「文学」に、文学にと、ひたすらそこへ集中していたあの燃える炎のようなもの」に強く魅かれていただけに「心残りである」と記す。

「美貌」へのアンチ・テーゼ(49・7「婦人公論」)は女の美貌についての断想で格別目新しいことは言っていないが、一、二拾っておくと、「低ければ低い鼻を愛嬌あるものに、細ければもって生まれた細い目を、あるがままの姿でかがやかせることを、どうして考えないのだろうか。」「精神の眠っている人は美貌も一しよに眠っているし、精神の活動しているものはその美も生きて動いてくる。」といったところが主張のポイントになるであろう。

「小さな窓」(49・7「婦人文庫」)は体調がすぐれず、何かという死の方に向う傾向に対して、五歳の右文のためにもう少し生きてやらなければと自らを鼓舞する気持ちを描き、「世智さまさま」(49・9「月刊信毎」)は最近のせつけんの押売りの多さとその手口の数々を紹介し、更に住宅事情の悪化の例として出産した若夫婦が

そのまま産院に住みついたり、学徒動員から帰った青年は箱車式の移動住宅を本気で考えているとして当時の世相の一端を示す。「苦しくなった 値下がりでも買えぬ」(49・12・15「毎日新聞」)では、これは談話筆記であるが、金さえあれば買えるようになったが、しかし実際には買えず、生活は苦しくなったと述懐している。

その他のエッセイに一言ずつふれておくと、「東京見物と唐簀」(49・5・3「毎日新聞」)は明治憲法発布の年に父は友人と四人で上京し、妻達は家にいたが、共同で唐簀を買ってもらってホクホクしていた。新憲法発布後三年目の今年、メーデーに参加して、ダンスをする若者たちのはつらつとした姿を見て新憲法も若い人たちによってわがものとされてゆくのだらうと考え、「柿苗」(49・6「小説新潮」)は柿の苗をもってはるばる佐多稲子宅を訪ねたところ留守でがっかりした次第を記す。

それらとは全く一転して風流なのが「柄にない話(B 随筆)」(49・11・10「風花」発行者は中村汀女)で、小豆島の神懸山頂には芭蕉(初しぐれの句)と尾崎放哉(いれものがないの句)の二つの句碑がある。昔勤めていた郵便局の局長は句会によく顔を出し、「太陽」にも投稿して時に入選すると機嫌がよかった。放哉は新鮮で、栄はつくつてみたい気が起った。敗戦の名月の夜に、佐多・壺井の両家と近所の友人合せて十人以上で句会を催し、六十句程つくつて互選を楽しんだことがある。それを中村汀女に話したら、書けの厳命が下り、そのうえめいめいの句も出せとの事だが、すっかり忘れてしまった所以も記す。

(この章完)

\* 本稿の年月の表記は原則として西暦とし、最初の二桁（19・20）を省略している。

注

1 この作品のタイトルはこののちのように変化する。初収作品集『あしたの風』（53・1・20 全日本社会教育連合会）ではこのままだが、『私の花物語』（53・6・5 筑摩書房）と『壺井栄作品集<sup>10</sup> 私の花物語』（56・12・5 筑摩書房）では『楓』と改題される。しかしこの改題は『花物語』という総タイトルに無理にあわせたものであり、初出・初版の旧題の方がより適切と考えられるので、あえて旧題のままとした文泉堂版全集に従った。

2 この雑誌は稀覯に属するものでなので付言しておく、東京都八王子市在住の詩人、小川富五郎が創立した白鳥書院から彼の編集で刊行された児童雑誌である。千家元麿を従兄に持つ小川は詩誌『新領土』の同人で、村野四郎を始め多くの詩人仲間があり、『赤い鳥』のような雑誌をつくりたいとしてプランを練り、前記の千家・村野の他、中西悟堂・水原秋桜子・笹沢清明・城左門・安藤一郎・外村繁・上林暁・壺井栄などのメンバーを選び、表紙は八王子出身の洋画家鈴木信太郎に依頼した。雑誌は毎月二万部の用紙の配給を受け、よく売れたが、大手の出版社や専門の編集者によるライバル誌が次第に勢力を伸ばすにつれ、部数は激減し、倒産した。『こども雑誌』（46・7・48・1）は全9冊刊行。うち、最後の二冊は『子供雑誌』とタイトルを漢

字に改めたり、判型を大判にして読者増をねらったが、所期の効果は得られなかった。最後に、『金と銀』（48・3）と改題したが、挽回は出来ず最終号となった。その後、『金と銀』の出版権を文寿堂が買いとり、光吉夏弥の編集で刊行されるが、三号で廃刊となった。以上は主として小島昭男・守屋健・原静雄編『詩人・小川富五郎の生涯と『こども雑誌』展 図録・追悼文集』（98・10・24 詩人・小川富五郎を偲ぶ会、松森務『こども雑誌』のこと 八王子市中央図書館の展示に寄せて』（96・10・15 八王子市中央図書館）による。

3 関根弘『壺井栄小論 探偵の事務所から』（52・9 『新日本文学』）。

4 同右。

5 壺井栄『小さな足あと（あとがき）』（65・10・30 『壺井栄名作集3 おかあさんのてのひら』ポプラ社）。

6 拙稿『壺井栄論（16）第六章 戦時下の文学（2）』（06・10・20 『都留文科大学研究紀要64集』）。

7 拙稿『壺井栄論（19）第八章 敗戦の混乱の中で（前篇）』。譲原昌子の以下の記述については『朔北の闘い』（85・11・14 同成社）付載の『研究資料』『作品集によせて』及び林真『薄幸の作家 譲原昌子著作年表』（80・8 『解釈』）等の記述に負っていることを記して感謝したい。